

国語教育ゼミナール

国語教育ゼミナールは、今年、四回目であります。「継続は力なり」という。会員のご協力によって、ここまで育ってきました。

今年は、六月に選出された国語教育ゼミナール企画委員会で、案を作り、次のように実施されました。日時、場所は、従来どおりです。

○会場 本学清心館第二会議室

○第一日 八月二十一日（水）

午前十時～十二時 学習指導要領の改定をめぐって 遠藤 庄治氏

午後一時～三時 作品研究・有島武郎「生れ出づる悩み」

芦谷 信和氏
有島武郎「一つの魂」（「生れ出づる悩み」より）の指導過程

橋本 雄二氏

○第二日 八月二十二日（木）

午前十時～十二時 中学校では文語文法をどう扱っているか

平田 利晴氏

中学校では文の構造・文の成文をどう扱っているか 宮岡 薫氏

午後一時～三時

文学史における近代

午後三時～五時

国崎望久太郎教授 懇親会

① 時ちょうど、小学校学習指導要領が告示された直後であり、「学習指導要領の改定をめぐって」は、時宜を得たもので反響を呼びました。教育現場での討議とは違った角度からの議論もあり有益でありました。

② 有島武郎の「生れ出づる悩み」の作品研究と、それを、中学校で指導する場合の指導過程・方法などを、いっしょに討議したのも、新しい企画でありました。ゼミナールの一つの見本ともいえましよう。

③ 文法に関する教科書の記述を、客観的な共通資料として提出し、中学校、高校の両側面から議論したのも、おもしろかった。中学、高校の両方に会員を持つ、このゼミナールの強みでもあります。

④ 最後に、国崎教授の森鷗外を中心とした明治文学史の見方についてのお話は、研究、教育両方面にわたって多くの示唆を受けました。母校の先生に、久しぶりにお話しをうけたまわることも、このゼミナールの特色であります。国崎先生は、夏の間、お病気でご休養のところを、おして、ご出講たまわったのであります。

⑤ 最後の日の懇親会は、地下の食堂で行ない、盛会でした。

⑥ 今年は、はじめの三つが、若い四人の会員によって発表、提起されました。大きな特色でした。次年度の企画と盛会をいっそう期待いたします。

出席者は、第一日三十名、第二日三十三名でした。
(長田久男)

Kよりの絵葉書

はじめて文学旅行に参加したKから絵葉書をもらった。Kは、行く先々での感想や記録を詳細にメモしているが、いまはその一部を綴り合わせて旅行記なるものをもの

しよう。

(七月十二日付) 日本三大松原の一つである虹の松原と玄海灘とが幾何学的な白い波線を境に対峙している。写真では鏡山の麓しか見えず残念、との由を記した後で「領布振りしより……」と小書している。山頂は霞がかかって見えなかったという意らしい。近松寺、唐津城の印象をKはこう伝えている。

近松寺——名護屋城の一部を移したという蒼然たる門をくぐると近松の墓石がひっそりと立っている。観光ずれがしていないため、かえって往時をしのばせるといふものだ。境内の小笠原記念館も一見の価値あり、舞鶴城——石段をのぼりつめた所に大きな藤棚がある。紫雲を見られないのが惜しい。城跡よりの眺望は写真の通り。点在する島名を、バスガイドが教えてくれた。

へ恋の姫島大島着せて
嫁に取島 高島田

(同日付) 一行は三時半に長崎に着き、六時頃まで市内見学をする。Kはグラバー邸が気に入ったらしく、ここと長崎港の二枚の絵葉書を送ってきた。

佐賀での激しい雨は、長崎に近づくにつれて夢となっていく。もう真夏の匂いである。東山手のオランダ坂、リンガー邸・崇福禅寺・諏訪神社、さらに大浦・浦上天主堂へと……さすがは長崎である。

約めてみればこんな具合である。Kのメモは「すばらしい」の連発である。

(七月十三日付) 昨夜、一同は本場のチャンポンを食べた後、市内をぶらついた。千ドルの夜景の絵葉書である。

朝四時半起床。五時に旅館の人にたのんで外に出る。山の手へ足が向く。茂吉の歌をくり返しながら海を見ていたら教会の鐘が六時を告げた。さすがの僕もこの時だけは敬虔になった。

(同日付) 柳川の消印だが、表は国際文化会館になっている。冒頭に「あゝ原爆許すまし」と書いている。鈍感なKも、さすがにその恐ろしさを感じたらしい。

白秋の故郷を訪ねてこう記している。

いま白秋詩碑の前に立っている。ピカ／＼光る夏の太陽の下で、詩碑は何かを語りかけてくれそうだ。

途中、たぐさんの溝渠を通ったがどれも予想外のわびしい光景だった。白秋のいう「水に

浮いた灰色の檻」は、もはや朽ちかけたのか。
(七月十四日付) 十三日の夕方、熊本に着き市内を散策。一緒にいた五六人、電車を間違えて、上熊本まで行ったらしい。その夜旅館で地酒を飲んだためか、熊本の夜はメモが空白になっている。Kはアルコールアレルギー性なのである。

水前寺公園からバスで五分程行くと、ひっそりとした小路に蘇峰邸がある。表札は徳富ではなかった。大江義塾跡は苔むせてひっそりとしている。その後、八雲・漱石邸をめぐる本妙寺へ。この寺の長い石段を下りはじめる頃から雨が降り始め、熊本城ではどしゃぶりにけぶる森の都も、また一興がある。

これは普通の葉書である。左端に鉛筆で黒くぬりつぶした一センチ四方のものが書かれている。Kは矢印して、「これは市電から見えた熊本城である」と弁解している。

* * *

Kはその後しばらくして訪れた。そして、僕も旅行記を書くから借してくれといって、これらの絵葉書を持って行ったままである。

(三回生、中西健治)